The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	収納具考 ： 向レ上開闔器
Author(s)	後藤, 偉沙雄
Citation	デザイン理論. 1970, 9, p. 40-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

収　納　具　考

——向レ上開闔器——

後　藤　偉　沙　雄

はじめに

近世初期において，〈抽斗〉が生活の場に登場するまで，日本人の生活に密接に関係してきた収納具は，棚の類・箱の類・袋の類である。各々は全くその性質を異にしているがゆえに異った用いられ方をし，生活の場において異った位置を占めてきた。そして又，まさにその性質の相異故に，棚と箱とは常に密接に関係しあい，或る時は主と従の関係になり，或る時は合体して新しい道具となってきた。或いは又，それぞれ別個の道を通り，進化発展してきたのである。

扨て，現在のわれわれの生活の周辺をみまわしてみた場合，箱は最も身近な収納具のひとつとなっているといえるであろう。木箱・紙箱・金属箱・プラスチック箱等々。その用途たるや，いちいち枚挙にいとまがないといえる。これら素材や形は異っていても，われわれは一様に〈ハコ〉と呼んでいる。では一体，〈ハコ〉が〈ハコ〉である特性とは何であろうか。「和漢三才図会」によると，「櫃ハ似レ厨，向レ上ニ開闔スル器」と定義している。櫃とは〈ハコ〉の類の総称であり，〈ハコ〉は櫃の小さいものの名称である。蓋と身によって構成され，上に向けて蓋を開閉するという点において，確かに他の収納具である棚の類・抽斗の類・袋の類と区別することができる。尤も歴史上，〈ハコ〉と呼ばれるもののうち，必ずしも「向上開闔器」でないものもある。しかしそれは，

「向上開闔器」の発展した形態と考えられるものなのである。この小論文においては，この「向上開闔器」に主として焦点をあて，この器が，収納具としてどの様に生まれ，成長し，死んで行ったかを見たいと思う。

織レ筥

「和名類聚抄」には，箱は竹器の部において記述されており，古くは，箱とは竹で作られた器の名称であったことを知ることができるが，又〈ハコ〉を意味する文字である箱・筐・篋・筥・篚などが竹冠を持つことによってもそのことを推知することができる。つまり箱は，竹を編むことによって，その生存が開始されたのである。

わが国において，縄文式時代に，竹籠を，竹条を放射状に組んでまるく作る方法と，網代に組んで方形に作る方法とが知られていたが，古く中国では，方形のものを筐（音＝匡）といい，円形のものを篚（音＝匪）といって，方・円によって名称を異にしていたのである。しかしわが国においては，上記の〈ハコ〉を意味する文字総てを〈ハコ〉と訓み，箱・筥を以って代表させ用いてきている。

弥生式時代には編物の技術は相当発達しており，縄文式時代晩期には既に，竹条で編んだ容器を漆の類で塗りかため，籃胎漆器として用いられていた。正倉院には現在，565個という大量の竹器が保存されているが，これらはその形と用途によって，東大寺花筥・東大寺花籮・中宮寺斎花筥と称されており，花筥は散華供養の花を盛るために，又花籮はそれを洗うために用いたという。これらは収納を目的としたものではなく，所謂〈ハコ〉というより〈ザル〉であるが，これらは蓋付き〈ハコ〉への一つの発展段階を示すものといえよう。

同じく正倉院には，葛箱・柳箱・藺箱があるが，これは正真正銘の〈ハコ〉である。北倉にある白葛箱を例にとると（蓋の長さ36.6cm，幅33.3cm，総高8cmの長方形の箱），その製法は，葛藤の皮をとり除いた白葛を経緯として平織ふ

うに編み，編み乍ら箱の形を作っていったもので，紙細工のように，たいらに編みあげたものを折りあわせて作ったものではない。これには，赤漆文欟木の厨子の納物，御書四巻と裹衣香二袋とを納めていたという。当時としては，非常な貴重品を納めていたわけである。

柳箱は，編み方は今の柳行李と同じであって，柳を緯とし糸を経として長方形あるいは円形に編みあげたものである。その編み留めには，楊の枝を纏い楊皮で結って縁となし黒漆を塗っている。これらもやはり貴重品を納めたものであって，橘夫人奉納の琥珀誦数を納めた箱（蓋の長さ 9.4cm，高さ 3.4cm），「納真珠箱」の朱書のある箱（蓋の径14cm，高さ 2.7cmの円形のもの），斑犀帯を納めた箱（蓋の径24.5cm，高 5.5cm）などがあるが，これも極めて特殊なものを納めるのに用いていたことがわかる。但し，この柳箱（やなぎばこ）は，平安時代，源氏物語などにみえる柳箱（やないばこ）とは全々別物である。柳箱（やなぎばこ）がいつごろから知られたものかは，あきらかではないが，「続日本記」に，養老六年（722)の詔によって，柳箱を82合奉ったとみえるのが最も古い記録であろう。[1] 次いで「延喜式」の内匠寮式に，柳箱に関する詳しい記録をみることができるがそれによると，このころは箱を「織る」「編む」といっていたことがわかる。[2] 又箱の大きさを規定しており，長さ：1尺6寸以下，1尺以上としている。この大きさは，正倉院の柳箱よりも大きくなっており，収納物が，正倉院のものと異ってきていることを示唆している。因に「延喜式」内匠寮式の皮筥に関する記録[3]から，衣筥，櫛筥の大きさをみると，その寸法は，前者：長1尺5寸5分，広1尺3寸，深2寸5分，後者：長1尺1寸5分，広1尺3寸，深1寸5分であり，ほぼ柳箱の規定寸法内に入るところから，平安時代初期には，皮筥のみならず，柳箱にも，あるいは衣類，装身具などが納められたのかもしれない。

藺箱は，藺草をたばねて渦巻状にしたものを芯として，蒲の葉などで巻き留めて作った容器で，箱の平面形は円形又は楕円形であることを原則とする。こ

の技法は，飯櫃盒と同じであって，藁を使ったものが櫃として，最近まで農家では用いられていたものである。

この様な，植物の条を利用して容器を作る技法は最も古い起源をもち，そして後世まで連綿と受継がれ，庶民の生活に重要な位置を占めつづけるのであるが，一方，皮をもって容器を作る技法も古くから行われており，少くとも，奈良・平安の両時代を通じて，柳箱や葛箱などと平行して用いられている。その起源はあきらかではないが，神亀6年(729) に黒塗の革箱を造っているのが，[4] 文献による最も古い例かと思われる。又天平勝宝8年(756)に孝謙天皇が東大寺に器物を寄附されたが，それは，黒漆の六稜の革箱，黒漆の銀鈿の丸革箱，黒漆乳點の革箱であったという。[5] これらは，今も正倉院にあるというが，どれに該当するものであるか，はっきりしない。いずれ，鏡などの貴重品を納めるのに用いられたものであろう。猶，正倉院には，鏡箱のほか，御袈裟箱（長46cm，幅40cm，高20cm）が保存されている。これらは，所謂漆皮の技法，即ち一枚皮を木型にはめて型をつくり，外面あるいは内外両面に布を貼って漆で塗り固めて作る技法によって作られたものである。奈良時代には，この様に，ごく特殊なものを収納するのに用いられた皮箱も，平安時代の前期頃には，収納範囲もかなり広がってきている。「延喜式」内匠寮式によると，[6] 衾筥，衣筥，剣緒筥，巾筥，唾巾筥，櫛筥，刀子筥の品名がみえており，それらの寸法は，衾筥(A) 長2尺，広1尺8寸5分，深5分，B）長2尺，広1尺7寸，深4寸)，衣筥(長1尺5寸5分，広1尺3寸，深2寸5分)，剣緒筥（長1尺2寸2分，広1尺1寸2分，深2寸)，巾筥（長1尺2分，広1尺2分，深8分)，唾巾筥（長1尺5分，広8寸，深8分)，櫛筥(長1尺1寸5分，広1尺3寸，深1寸5分)，刀子筥(長1尺2寸，広1尺，深1寸2分)とあり，奈良時代に比し大きく，又，新しい用途をもった箱が出現していることを知ることができる。柳箱には，許容性のある寸法の規定をし，皮箱には厳密な寸法の規定をしている。又柳箱が素材名で呼ばれているに対し，皮箱は用途名で呼ばれている。これらのことか

ら，柳箱と皮箱の間には，用いられ方に相違のあったことを認めることができる。皮箱の方が利用度が高く，機能分化していたと考えられ，その点収納具としては進化していたと考えられる。

皮箱は，時代と共に「かわばこ」の「ば」が略され，「かわご」というようになる。[7] 12世紀初期の成立とされる「今昔物語」の女人仕二清水観音一蒙二利益一語に，「皮子ラ開ケテ清気ナル衣一重生口袴口取出テ女ニ著セテ具シテ将行く」[8] とあり，やはり衣類を入れていることが知られる。又保元三年（1158）には，後白河上皇が宇治に御幸の時，衣服を納めるのに中持の皮箱一雙を用いている。[9] その皮箱は蒔絵を施し桴漆したものであったという。やはり，衣類を収納してはいるが，ここでは携行用収納具として用いられている点に注意する必要がある。

抑々，この漆皮は，皮そのものが芯であるため，出来上がりが木製素地のものと違い，角が丸味をおび，柔かい感じを人に与えるものであり，又軽いため好んで使われたと思われる。しかしその製法には手間がかかり，木製素地に比べて歪みが生じやすいことなどから，平安時代以後ほとんど用いられなくなってしまうのである。[10] そして，後世「かわご」という名称だけは残っていくが，それは皮でつくられたものではなく，竹を編んで作られた行季と同じものであり，「皮籠」という字で表されるのである。つまり「かわご」の中味が全々違ってしまうのである。皮から竹への，この変身は，中世において除々に進んでいったものと思われるが，15世紀後期から16世紀初期頃に成立したと考えられている「七十一番職人歌合」には，桧物師や葛籠造と共に皮籠造が歌われており，[11] 都では，この種の容器の需要が大きかったことを示していると共に，当時，人目をひく新興の職人であったことをも示している。或いは応仁の乱が皮籠の需要を高めたのかも知れない。この歌では「竹かはご」と特に呼んでいるところから，この頃は，本ものの「かわご」と竹の「かわご」の併存時代であり，前者から後者への過渡期であったと思われる。皮籠造は「本もの」の「かわご」をも造っていたのかも知れないが，やはり当時を代表する皮籠造は，竹の「か

わご造りであったと考えられるのである。既に主流は竹の「かわご」にあったのであろう。江戸時代には，更に変じて，竹のあじろの上を紙張りして渋を引いた「渋革子」も用いられたのである。[12]

「編み」と「漆皮」という二つの技法のうち，後者の技法はすたれるが，植物の条を編んで容器を作る技法は，後世に至つても受継がれていく。その容器は，上層階級におけるよりも，むしろ農村や都市の民家において連綿と用いられ続けてきたように思われる。材料は板と違って，鋸や鉋などの特殊な道具によって加工される必要がなく，又製作には精巧な技術も要せず，竹や藁，雑木など入手しやすい材料を使って作ることができたから，安価に入手することができたに違いない。そして，軽くて，強いという性質のために，大いに重宝がられたのである。旅などに，衣類その他の必要品を入れて持運び，家庭内での収納具としてよりもむしろ，持運びを重視した携行収納具としてその機能を発揮するのである。そして，竹や柳，葛で編んだ容器が「行李」と呼ばれるのは，まさにその特性の故なのである。

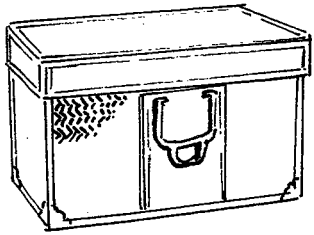
「行李」とは，旅に携行する物をいった名称であって，「日本釈名」によると，「もろこしの書に，たびに持行物を行李と云，和俗つゞらにてあみたる器を行李と云も此意なり」とあるように，素材による名称ではなく，その機能を以って名づけられた名称である。素材には，竹・柳・葛が主なものだが，杞柳（こりやなぎ）の条で作ったものは，但馬の豊岡，出石地方から産し，柳行李と称した。これは杞柳の枝を丸のまま一本ずつ並べ，麻糸で編みあげ，角の部分に布・皮を縫いかぶせて補強したもので，柳箱の技法と同じものである。大きさは，大体２尺５寸×１尺４寸×７寸５分位である。又竹行李は，縁竹にマダケ・モウソウダケを用い，網代に編んで作った。大きさは，大体２尺４寸×１尺４寸×９分で，「網代行李」ともいい，山城・越前などから産した。[13]竹行李は丈夫で安価なため，需要が多かったのである。「行李」の名称がいつから

使われたものか明らかではないが，「和爾雅」にみえるのが最も古い記載例とすると，[14] 元禄時代までには用いられていたことになり，早ければ，南蛮文化と共に，近世初期に入って来たものかと思われる。「大阪陣図」[15]に登場する数多い逃げまどう民衆の中に，竹行李を肩にかついで，いちもくさんに走っている男が描かれているから，この頃には実物のあったことは確かである。それが，「かわご」と呼ばれたか「こうり」と呼ばれたかは不明である。行李は，「字貞漫稿」に，「今世間ニテ衣類等携ヘ行クコトアレバ、柳合利或ハ南部籠ニ納レ之、風呂敷ニ包ミ負レ之、或ハ行李、籠ニ納ズ直ニ風呂敷ニ包ミ携フコトモ専ラ也」というような用い方をされると共に，弁当行李，文庫行李等として用いられたのである。

「葛籠」(つづら）は行李とは異り，素材による名称である。名の如く，素材は葛の蔓で作るのであるが，経を丸藤にして，緯をわり藤にして編んだもので，四方の角々と縁はなめし革にて包んだものである。[16] しかし，その製法は，古代の葛箱や柳箱と異っており，「つゞらとはつゞら櫃なり」と「貞丈雑記」にいっているように，櫃であり，全体を編みあげたものではない。「和漢三才図会」によると，葛藤によって作られた葛籠は，広島より多く産し，それの四隅は皮を著け，それに漆をぬっていたという。しかし，このような「本もの」の葛籠は，天保頃には少なくなっており，竹籠を紙にて貼り，又は桧の薄板にて作り紙にて貼ったものが多くなっていた。[17] 現在，民家や博物館で見ることのできるのは，多くは後者のものである。

葛籠は，室町時代中期頃には用いられていたらしく，「調度歌合」[18]に「人めのみ志げき深山を分わびてゆき休まぬつゞらをり哉」とよまれ，又同じ頃の「七十一番職人歌合」にも葛籠造がよまれている。[19] 又「大阪陣図」[15]には，おそらく葛籠と思われる櫃を杁でかついで逃走している図が描かれている。それも一人だけではなく，大勢かついでいるところから，16世紀末には庶民の間に普及していたのであろう。これと同じ形をした葛籠は飛騨民俗博物館などで見る

ことができる。(図-1) それは，棒通しの金物がついているところから，携行用収納具として用いられたものであり，中世の絵巻物（石山寺縁起絵巻や粉河寺など）に散見する荷櫃の一つの変形ともみられる。



第１図

扨て，葛籠に何を収納したかということであるが，「和爾雅」によると，「衣籠又云葛籠」とあるところから，主として衣類を入れたものであろう。「和漢三才図会」には「凡宿直泊番人、毎納二寝衣一名二番葛籠一、小者名二伏見三寸一、家嫁婦必用レ之、衣籠也、」とあるところから、18世紀初期頃には番葛籠とか伏見三寸とか称せられる衣類収納用の葛籠があり，小型の伏見三寸は嫁入の調度品になっていたことがわかる。しかし，必ずしも衣類のみに限られていたわけではなく，いろんなものが入れられており，「芸州国郡志」上，土産門に，「或納二衣服一、又入二雑具一矣」とあるによってもそれを知ることができる。

このような行李や葛籠は，おゝむね小さく，持運びに便利なように作られている。これは一面において，庶民の行動の旺盛さを示しているといえるであろう。しかし，大きなものもなかった訳ではない。約３尺立方の大葛籠が現に残っており，(20) 持運ぶには車によったものであろうが，この様なものは，商家など収納物の多い場合に限られていたのである。このように大きな葛籠は例外として，ごく普通の大きさの行李や葛籠は，屋内では長持の上に置かれたもののようで，元禄頃の浮世草子等の挿絵にその状態を見ることができる。(21)

櫃

「和名類聚抄」によると，櫃には長櫃，韓櫃，明櫃，折櫃，小櫃等の種類があり，又「和漢三才図会」によると半櫃というのもあった。即ち，長櫃は，脚

のないのを長持ともいい，脚のあるのを韓櫃という。韓櫃は唐櫃ともいう。明櫃とは白木の櫃であり，小櫃は即ち箱のことである。又半櫃は荷櫃ともいう。折櫃は儀式などに用いられる箱であり，肴・菓子などを盛る「折り」であって，収納を対象としたものではない。

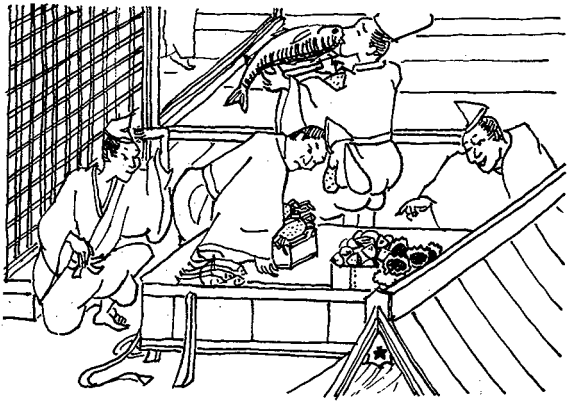
扨て，板材を組合せる結合法としての枘の利用は，弥生式時代には習熟していたと考えられているが，板材を組合せて長方形の容器を作る技法が，どの程度発達していたかということは，まだはっきりしていないようである。しかし正倉院の古い遺品などから推察して，7世紀あるいは6世紀まで，その起源を遡ることができるという。[22]

正倉院には，168合もの多数の古櫃が保存されている。脚が6本又は4本ある唐櫃と，脚のない形式の倭櫃とよばれている種類があるが，その名の如く，唐櫃は大陸から渡来したものであり，倭櫃は本邦発案のものである。唐櫃が桼漆製であるのに対し，倭櫃は白木造であり，両者とも被せ蓋造りで，身の側板の構成は，写真でみる限り，6枚枘組接，蓋の側板は2枚枘組接で，両者とも釘を併用している。（この構成法は，近世の現存する長持やタンスにも用いられており，明治時代まで変化していない。）正倉院の赤漆四足櫃は，孝謙天皇が東大寺大仏殿に施入された献物を納めた唐櫃であるが，主として古代の唐櫃は，法具，法物を入れるのに用いたものであり，寺院，貴族などの特権階級の持物であった。

大きさには，規定はなかったらしく，「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」より，一部漆塗韓櫃の寸法を拾ってみると，長さ：3尺4寸，3尺8寸，2尺7寸8分，3尺2寸，3尺3寸，等，まちまちである。[23] 又「延喜式」主計寮式から櫃の大きさを抜書すると次の様である。[24] 白木櫃：長5尺以下4尺5寸以上，広2尺3寸以上，深2尺以下1尺8寸以上。塗漆韓櫃：長3尺4寸，広3尺2寸6分，深1尺4寸。白木櫃には大まかな規定しかされてないのに比し，塗漆韓櫃には，寸法など製作上こまかい規定がなされている。そして大きさも異り，白

木櫃の方が大きく，最大5尺であるのに比し，塗漆韓櫃は3尺4寸となっている。　前述の「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」にみた寸法とほぼ同じであるが，この方は寸法も定っており,まちまちであった寸法も，平安時代に入って，漸く固定化し又形式化してきたとみられる。

これら唐櫃は，もともと荷物運搬のためのもので，従って寸法も運搬に便利なように，或る程度は考えられたものであろう。長唐櫃の半分のものを半唐櫃又は荷唐櫃というが，長唐櫃はこれを棒にくくって，2人してかついだのに対し，荷唐櫃は2個を杁（棒）の両端にくくって，杁の真中を1人で荷って運搬したのである。中に納れるものは様々であり，土佐日記（935ころ）には「なぬかになりぬ。おなじみなとにあり。けふはあをむまをおもへどかひなし。たゞなみのしろきのみぞみゆる。かゝるあひだにひとのいへの、いけとなおるところより、こひはなくて、ふなよりはじめて、かはのもうみのも、こともの ども、ながひつにになひつゞけておこせたり。」とあるように，魚などを入れて持運んでいる。食物を入れて持運んでいる例は，絵巻物にも描かれており，「鳥獣戯画」(12世紀後半）には，野菜と思われるもの，又粉河寺縁起絵巻（1183ころ）には果物か野菜のようなもの，又魚の入れられている様子が描かれている。



第 2 図

その他春日権現験記(図-2)絵や石山寺縁起絵巻などにも，山海の食物の入れられている様子が描かれているから，平安時代・鎌倉時代を通じて，進物・貢納の際など，この様な使われ方をしていたのであろう。

その他，経文や鎧・衣類なども納めるのに用いられ，それぞれ，経櫃，鎧櫃，小袖櫃などと呼ばれている。

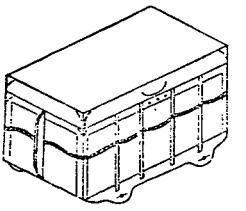
鎧櫃の出現は，法然上人絵伝（第10巻）や後三年合戦絵巻，男衾三郎絵詞に描かれているところから，これらの絵巻物の成立した鎌倉時代末（13世紀末から14世紀初）以前と考えられるが，その起源は，遠く11世紀の武士の抬頭期にまで遡って考えることもできるように思う。

この様に唐櫃が食物の贈答や，鎧などの運搬に用いられたのは，主として古代・中世においてであり，それも富裕な支配者階級に属するものだけであった。中世の一般庶民は，むしろ曲物で作った行器（外居）を用いていたと思われ，「板もの」が支配者階級のものとすれば，「曲もの」は一般庶民のものであった。

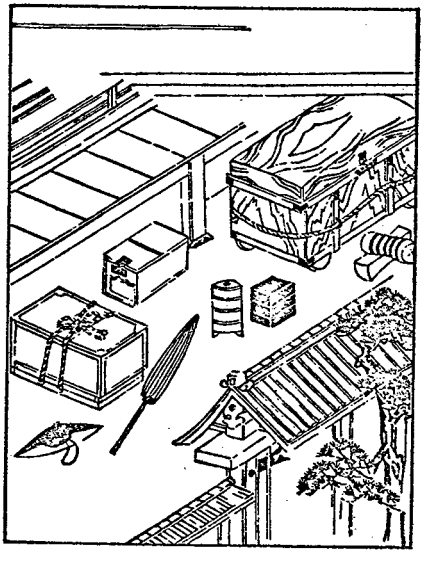
もともと，わが国独自のものではなく，大陸伝来の唐櫃は，戦国時代という試練の期間を通じて，ごく特殊な場合を除いてその脚を喪失していくのである。そして，近世社会の始まるころには全く新しいタイプの櫃が登場していたのである。

「板もの」が支配者，僧侶などの極く限られたエリート層の持物から，かなり一般的な階層にまで用いられるようになるのは，大鋸と台鉋の出現によって，板が容易に作られるようになった頃，即ち15世紀初頭から16世紀にかけてのころからである。この頃から「板もの」の主流は民間に移行し，それと同時に新しいタイプの収納具が出現する。その顕著な例が，箪笥及び車戸棚，車長持などの「車もの」である。車付きの小屋は，一遍上人絵伝に描かれているが，車長持の起源が中世まで遡れるかは疑問である。好問堂主人著の随筆「麓の花」（文政二年）によると，天正（天正元年は1573年）から明暦（明暦元年は1655年）のころまで，都及び田舎ともに，車長持を家々に備えていたという。(図-3) 江戸時代初期の文学作品の挿絵にはしばしば車長持が描かれており，その存在を裏付けている。たとえば，西鶴の「好色五人女」の「虫出しの神鳴もふんどしか

きたる君様」の挿絵には図―4のような車長持が描かれている。[25] 又西沢一風の「新色五巻書」の挿絵にも描かれているから，元禄頃には既に普及していたのであろう。それによると車長持は畳の上におかれ，その上には葛籠や行李がおかれている。このような，室内における収納具の位置関係は，他にもみることができるから，当時都市では一般的であり，又農家では，「ダイドコロ」や「ドマ」におかれたのであろう。[26] 構造は必ずしも一定していない。又意匠も時代及び地域によって異っていたものと思われる。車の付け方は，図―3と図―4のものとは異っているが，図―4と図―5のものとは同じである。図―3のものは，図―6の実物によって車の構造を知ることができるが，図―4及び図―5の車の構造は，どうなっているのか推測の域をでない。蓋は図―3，4，6，7はヒンジにより開閉できるようになっている。しかし被せ蓋もあったであろう。運搬には，図―3，4，7の如く綱を胴に廻して引っぱるタイプのものと，図―5の如く荷造りして押すタイプのものがあったようである。



第 3 図



第 4 図

扨て，車長持の出現してきた理由として，次の2ツの理由が考えられる。

1)，生産地と消費地が異っており，生産地から消費地へ長持を運搬する必要があったこと。江戸時代初期においては，指物の道具や技術は，江戸時代末期程

には発達していなかったから，概して木柄は太く，その為に6尺長もある大きな長持は相当に重く，遠路を2人位でかつぐには重すぎたのである。

2)，火災の時，家財道具を長持の中に入て持運ぶに便利であった。又戦乱などの場合も同様であった。天正の頃は，信長・秀吉が活躍するころであり，激動の時代であったから，家財道具だけは，いつでも持ち出せるような，移動家具が必要とされたのである。

明暦3年（1657）の大火は未曽有のもので，江戸市民10万人が焼死したといわれているが，その時，江戸市中は車長持を押して逃げる人々で一杯であったという。「車長持を引きつれて、淺草をさしてゆくものいく千百とも数しらず。人のなく聲、車の軸音、焼崩るゝ音に打そなえて、さながら百千のいかづちの、鳴おつるもかくやと覚えて、おびただしともいふばかりなり。」と浅井了意の随筆「むさしあぶみ」に述べられている。(図-5)

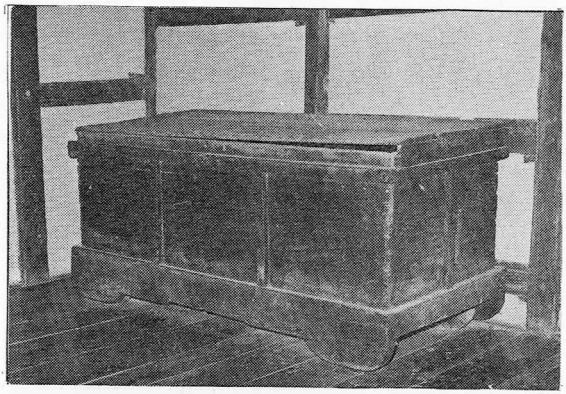
第 5 図

この大火から24年後の天和元年には，「火事出来之節両国橋假橋長持ナラビ車長持通シ候ヘバ往還之坊ニ成候間通シ申間敷候」との町觸がだされており，車長持が，非常の際都市交通上好ましくない処から，禁止されてはいるのだが，あまり効果があがらなかったとみえ，同3年にも「車長持，向後彌停止之事」との觸が再度だされている。この頃から漸く車長持はみられなくなっていったようである。しかし田舎の方では，相変らず用いられていたようで，「ことし文政二年四月ふたらの御山へまうでしおり，古河といへるうま

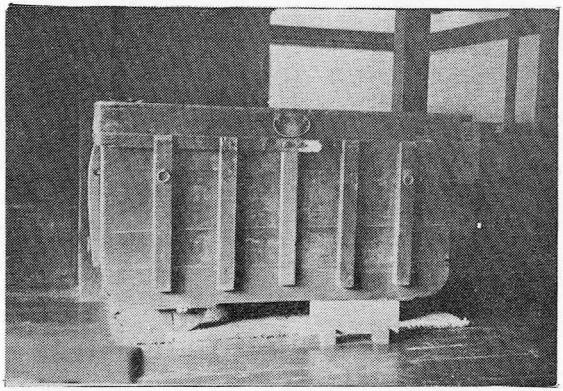
つぎにて、ある家に車長持あり……」と「麓の花」は迷べている。

扨て，車長持には，家財道具一切を入れて運んだようであるが，中には，次のように小判を入れた例もみることができる。

「彼の長持に入置きたる諸道具を引出すとて、内に入りて其の道具を運びだせば、底板動きけり、よくよく其の底をみれば、二重底にして、其の下に何やら物あり、因って其の底板を取りて見れば、其の下に小判をならべ置きたり。かぞへ見れば慶長小判にて七百両あり……」[29]



第 6 図



第 7 図

現在では，殆んど実物を見られなくなってはいるが，私の実見した限りでは，豊中市の日本民家集落博物館に1個，(図-6) 川崎市立日本民家園に1個が所蔵されている。(図-7) 前者は，岩手県の民家に，後者は川崎市の古民家に置かれているが，関東以北に発達したものであろう。

一方，長持は車長持よりやゝ遅れて普及していったものと思われる。西鶴の「世

間胸算用」などの挿絵に長持の描かれているのをみることができるが,[27] 奈良，京都，大阪，江戸など主要都市では元禄頃にはかなり普及していたものであろう。大鋸，台鉋の普及，秀吉，家康の天下統一による世情安定が，長持のようなスタティックな道具を普及させた大きな要因であったと考えられる。長持の原型は，古代の倭櫃に求めることができるが，それよりも，車の不要になった車長持の変身として把えたい。16世紀半頃，奈良，京都などの工業先進地域から普及しはじめ，次第に地方の都市へと普及していったと思われるが，人里離れた山漁村では，木製の長持や櫃は，幕末或は明治に至るまで普及しなかったのである。「日本の民具」[28]によると，岡山県の山中では，木挽が「山の木をきって板や角材をつくりはじめたのはいまから百五十年あまり前のことであった」という。そして，明治の中頃まで，一般農家で鋸を持っているものがきわめて稀であって，近在の都市で買入れるにしても経済的余裕のある場合に限られていたのである。

小　箱

櫃の小さいものが箱であり，箱のうち更に小さいものが小箱である。

小箱は歴史上，その種類が甚だ多く，生活が多様化し，物質が豊富になり，しかも生活が様式化する程多くなっているようである。江戸時代までの小箱の内，主なものをあげると，硯箱（料紙硯・平硯・懸硯），手箱，文箱，短冊箱，色紙箱，水引箱，熨斗箱，文庫，経箱，造紙箱，印箱，薬箱，香壺箱，櫛箱，打乱箱，掻上箱（化粧具を入れる），鏡箱，唐匣（又は唐櫛笥），革箱，沓箱，行器，冠箱，枕箱，銭箱，重箱，菓子箱，煙草入箱，合子，香盒，食籠，用捨箱，香箱等々であるが，用途に応じてその他にも様々のものが作られている。これらのほとんどは，現在に存在価値がなく，消滅してしまっている。しかし乍ら嘗ては，生活の場において，小箱という限定された世界にありながら，実に形，メカニズム，意匠などが工夫され，生きてきたものなのである。これらには，或る一つのパターンがあり，それを，日本調度の一つの頂点を示すと考えられ，

後世の支配者階級の調度の典拠となり，又ひいては庶民文化にも影響をもった，平安調度の小箱についてみたい。

「類聚雑要抄」巻四の調度目録から，小箱だけを抜粋すると，寸法，名称は次の如くである。

A）母屋調度

香壺筥（方1尺，深3寸8分，盖鬘9分）

櫛　筥（方1尺，深3寸之中，盖鬘9分，懸子あり）

薬　筥（方1尺5分，深4寸3分之中，盖鬘9分）

造紙筥（方1尺，　　）

枕　筥（長7寸2分，弘5寸5分，深2寸5分）

B）庇調度

打乱筥（長1尺1寸5分，弘9寸5分，深1寸）

重硯筥（長1尺2寸7分，弘1尺1寸2分）

唐　匣（方8寸5分，深6寸，上に台あり）

鏡　筥（径1尺1寸 八花前，深3寸5分内，盖鬘9分）

冠　筥（身深6寸9分，盖鬘1寸1分，四葉八角）

C）北庇調度

浅硯筥（長1尺2寸2分，弘1尺6分，深2寸7分，盖鬘9分，懸子あり）

掻上筥（方8寸3分，四葉入角，台，懸子あり）

手　筥（長1尺2寸5分，弘8寸，高6寸4分半，盖鬘9分，三懸子あり）

これらの箱は，二階厨子や二階棚に置かれたりして，棚と密接な関係を持ち乍ら使われている。意匠も，箱相互間，又厨子や棚との間に統一がとられ，これらが一緒になって，一個の有機体となっているのである。

扨て，箱内部の収納方法について，北庇の手筥を例にしてみると，先にあげたように，この手筥の寸法は，長さ1尺2寸5分（約38cm）で，被せ蓋造りの立方体の筥であるが，この中に収納されるものは次の如き多数の品物である。

A）イ）すき櫛　20枚

解　櫛　2枚

ロ）六稜形銀製経粉盤

五葉入角形の銀製歯黒女盤

六花形銀製水入

ハ）八稜形の鏡を入れる銀製の箱

ニ）鋏，鑷子，髪掻，耳決，櫛掃，釵子

ホ）歯黒女壺，歯黒筆

ヘ）麝香

B）小形硯箱

万葉集抄，後撰集抄，古今上下抄等，丁子香，桂心，甘松香，胡椒，

薫衣香，白檀香等の香と薬

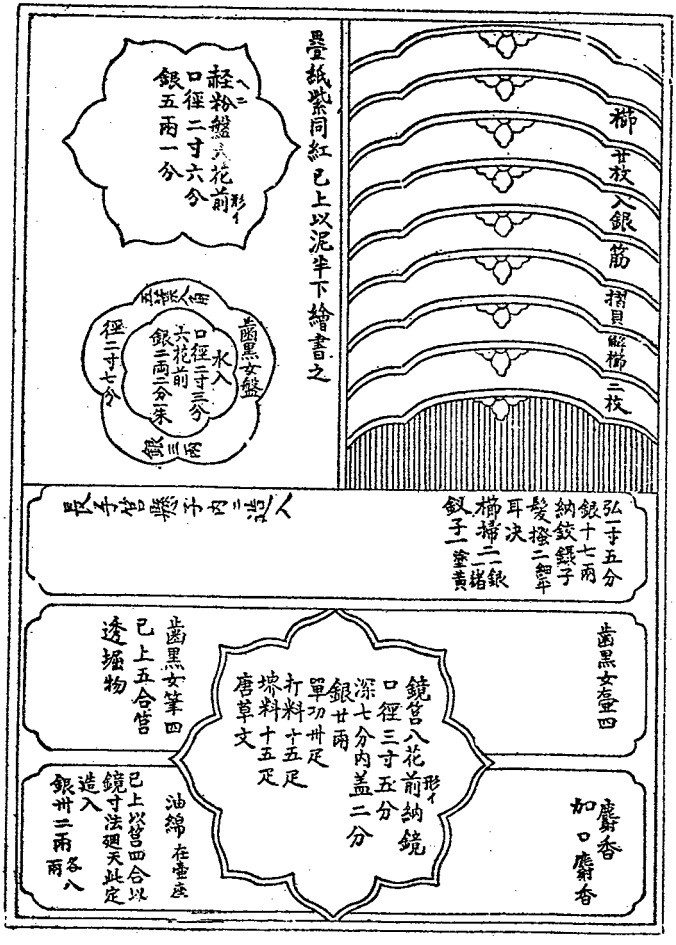
C）色染めの薄様紙五帖，檀紙一帖

D）沈枕

火取母，霍香や甘草の香と薬

熨斗

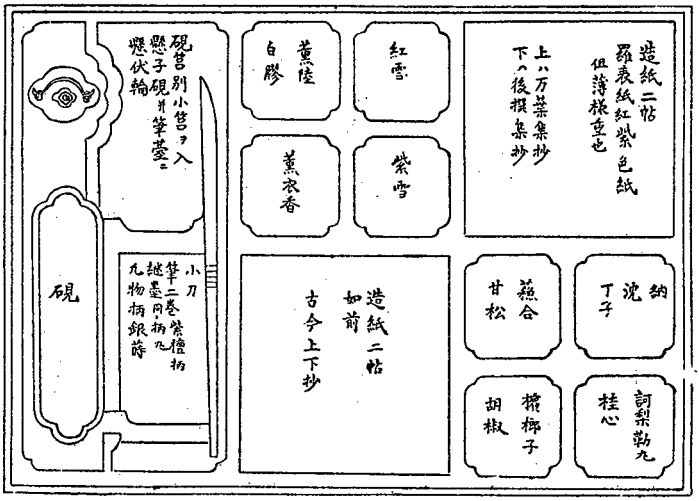
これらの種々雑多なものを，どのようにして小さな箱に納めることができるだろうか。それには，先ず懸子が用いられなければならない。この箱には，次の様にして納められている。それは，上記のように，A），B），C），D），の四つの大きなグループに分け，A），B），C），をそれぞれ第一，第二，第三と三つの懸子に入れ，D）を身に納めているのである。そして，第一懸子は，方立によって三分割され，（イ），（ロ），（ハ，ニ，ホ，ヘ,）というように納められる。(図-8) 第二懸子にも，それぞれが容器に入れられ，(図-9) 整然と配される，第三懸子には紙が，そのまゝ置かれる。身は方立によって２分割され，沈枕を入れた蒔絵箱，甘草・大黄を入れた蒔絵箱，霍香，木瓜などが入れられた蒔絵箱，及び六葉の火取母が納められる。一方へは，熨斗箱と白物を入れた



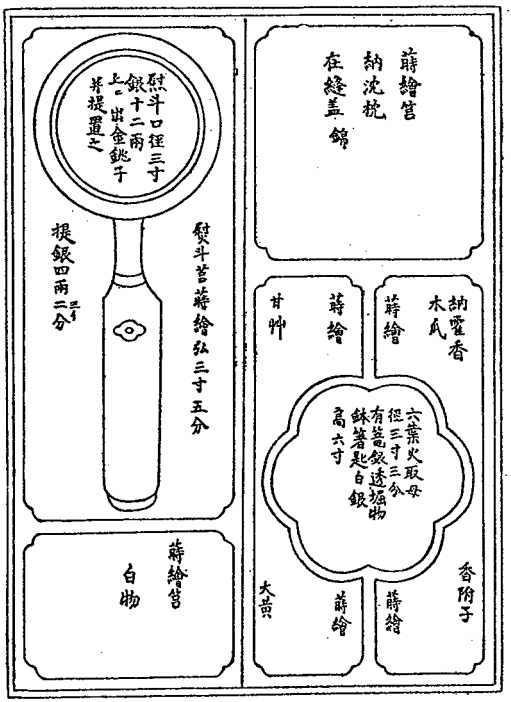
第一懸子　第 8 図

蒔絵箱が納められるのである。(図-10)

この様に一つの手箱の中を，何段階にも分割することによって，種々雑多な品物を，合理的に収納している訳である。この様な収納の仕方は，この手筥だけでなく，他の櫛箱，硯箱等々にも共通して行われており，この様な，機能の



第二懸子　第 9 図



身　第 10 図

分化と空間の分割による収納法は，平安貴族の調度の一つの特色といえる。これを用いるには，きめの細い神経を必要とするが，その点，風呂敷のような，掴み所のない，又なんでも包み込んでしまう伝統的収納具とは全く逆の立場にあるものといえる。風呂敷が，その包含性の故に，いかなる事態にも順応して生きのびていくのに対し，極度に発達し，完成された平安貴族の調度は，その後，多少の

変更が加えられ乍ら，武家調度へと受継がれていくが，結局は形骸化し死滅してしまうのである。

おわりに

以上で,「向上開闔器」の考察を終る。資料不足及び紙数の都合から，十分に言及しえなかった点は今後の課題としたい。

扨て，一般的に，収納具は時代により常に変化し，留ることをしない。そして「ハコ」の変身する過程を，大別して四つの方向があるように思われる。第一の方向は，集積の方向である。例えば，明治に入って，長持は側部に抽斗や引戸を付けられて，箪笥や戸棚へ変身するのであるが，そのように他のエレメントを導入することによって変身する方向である。第二の方向は，分離の方向である。身と蓋とが一体であるべき「ハコ」の蓋のみが分離し独立の道具となる。広蓋や打乱箱などがそれである。又車長持への変身もこの方向である。第三の方向は，脱皮の方向であり，そのまゝの形態でありながら衣を脱ぎかえる。「かわご」がその例である。第四は,「みせ」への方向である。人間の美意識は，常に道具をして美への階段を上らせる。道具から「みせもの」への方向であり，それが極限に達した時，収納「具」としての歴史を終わるのである。

現代において,「収納具としての」ハコのその存在意義は嘗て程大きくはない。しかし,「パッケージ」という新しい概念の登場によって,「ハコ」は新しい生命を与えられたといえよう。

(註)

(1) 「続日本紀」養老六年十一月丙戌、詔曰、……奉二為太上天皇一……造二……銅碗器一六十八、柳箱八十二、

(2) 年料柳筥一百六十八合、一尺六寸已下 二尺已上

料柳一百三連、山城国進之　織レ筥料生糸一十二斤、巾料調布一丈、浸レ柳料商布一段、長功三百卅六人、中功三百九十二人、短功四百卅八人

(3), (6)　年料革筥廿合、就中衾筥四合、三合各長二尺、広一尺八寸五分、深五寸、三合各長三尺、広一尺七寸、深四寸　衣筥六合、鷹鼻各長二尺三寸五寸五分、深二寸五分、広一、劔緒筥一合、長一尺二寸二分、深二寸一尺一寸三分、広一、巾筥二合、各方二尺二分、深八分、唾巾筥二合、各長一尺五分、広八寸、深八分、櫛筥四合、各長二尺一寸五分、三寸、深一寸五分、広一、刀子筥一合、鷹鼻長一尺二寸、深二寸二分、広一、料牛皮十張各長八尺已下、七尺已上、鹿皮十張、各長五尺已上、漆六斗六升四合、熟麻廿斤七両、張縄料、帛一丈五尺、石見庸綿廿二斤十両、掃墨二斗四合、帖料信濃調布四端二丈五尺、小麦二斗四合、……

(4)　黒川真頼著「工芸志料」巻七，　神亀六年一千三百八十九年、此ノ際工人革匣ヲ造リ多ク黒漆(クロヌリ)ヲ施ス是ヲ黒漆ノ革匣トイフ。

(5)　同「工芸志料」巻七，　天平勝宝八歳一千四百六十年孝謙天皇大和ノ奈良ノ東大寺ニ器物ヲ寄附ス其ノ器物ハ則黒漆ノ六稜ノ革匣、黒漆ノ銀鈿ノ革匣、黒漆ノ銀鈿ノ革ノ丸筥、黒漆ノ乳點ノ革筥、ナリ既ニシテ又黒漆ノ銀鈿ノ八稜ノ鏡　、黒漆ノ銀鈿ノ鏡　ヲ寄附ス此ノ器物今尚存ス。

(7), (12)　「類聚名物考」皮子。今思ふに、皮子は加者婆古の婆を略ていふなり、もとは革にて作れるを、竹にて作りしをも、そのまゝ革子といひしも有るなり。

渋革子　　志ぶかはご

今世に有る竹のあじろの上を、紙張にして渋引たる物なり。

(8)　今昔、京ニ父母モ无ク類親モ无クテ、極テ貧シキ一ノ女人有ケリ、（中略）男ノ云ク、速ニ行キテ可レ告シ、但シ著給ヘル衣コソ、極テ見苦シケルト云テ、忽ニ皮子ヲ開テ、清気ナル衣一重生口袴口取出テ女ニ著セテ、具シテ将行ク。

(9)　巻七、保元三年一千八百十八年　後白河上皇宇治ニ御幸ノ時衣服ヲ納ルヽニ中持皮筥一雙ヲ用キル其ノ中持ノ皮筥ハ蒔画ヲ施シテ以テ髹飾ス而シテ又其ノ台アリ亦蒔画ヲ施シテ之ヲ髹飾ス

(10)　小学館発行，原色日本の美術 20　219p.

(11)　五十三番，右。

月見つゝいたづらふしのなきまゝに

よの程造る竹かはご哉

(13) 「毛吹草」山城　網代籠履　近江　籠履　越前　戸口網代籠履
但島　柳籠履　備中　柳籠履　備後　柳籠履　日向　藤籠履

(14) 貝原好古著，元禄元年自序

(15) 大阪城天守閣蔵，至文堂発行の「日本の美術」No. 20　近世初期風俗画による。

(16), (17) 「貞丈雑記」　一つゞらと云はつゞら櫃也、つゞらと云草のつるにて作る也、つゞら藤の事也。つゞらびつは、たてを丸藤にして、ぬきをわり藤にして組たる也、四方の角々とふちは、なめし革にて包む也。今はつゞら藤にて作りたるは少し、竹籠を紙にてはり、又は桧の木の薄板にて作り、紙にて張りたるも多し。

(18) 15世紀末から16世紀初頃の成立。

(19) 五十三番，左。
我恋はまださらされぬ青つゞらくるとはすれどさねしよぞなき

(20) 金沢市江戸村所蔵

(21) 岩波書店発行「日本古典文学大系」　浮世草子集，　480p.　新色五巻書（四之巻）

(22) 小林行雄著「続古代の技術」　66p.

(23) 古事類苑，器用部十二，家什具の項による

(24) 凡諸輪庸、……二丁白木韓櫃一合、長五尺以下四尺五寸以上、広二尺三寸以上、深二尺以下、一尺八寸以上、固作以二小平釘一、署二専当郡司名一、三丁塗漆韓櫃一合、長三尺四寸、広三尺二寸六分、著脚従レ端入三寸、深一尺四寸、板厚六分、手取長一尺三寸四分、広二寸三分、厚一寸六分、底下横木広一寸五分、厚一寸二分、従二櫃底一至レ地二寸、従二櫃上一一尺一寸四分、蓋深二寸、上板縁端出二分、簾取六分、櫃表裏皆赤漆、四角及縁手取黒漆。

(25) 岩波書店発行「日本古典文学大系」　西鶴集上　286p.

(26) 川崎市立日本民家園内旧清宮家には板間に車長持がおかれている。

(27) 岩波書店発行「日本古典文学大系」西鶴集　257p.　「世間胸算用」巻三

(28) 角川書店刊、日本常民文化研究所編　「日本の民具」　199～200p.

(29) 「市井雑談集」による。

参考文献

(1) 日本古典文学大系20，47，48，55，59，64，9i，100，　岩波書店発行
(2) 八文字舎本五種　有朋堂文庫
(3) 黄表紙十種　有朋堂文庫
(4) 日本住宅室内飾り道具図解　杉本文太郎著　建築書院発行
(5) 日本随筆大成　第六巻他，日本随筆大成刊行会発行

(6) 大百科事典　平凡社刊　昭和８年

(7) 平安時代国民工芸の研究　渡辺素舟著　東京堂発行　昭和18年

(8) 古代の技術　小林行雄著　塙書房発行　昭和43年

(9) 続古代の技術　小林行雄著　塙書房発行　昭和43年

(10) 職人の歴史　遠藤元男著　至文堂発行　昭和41年

(11) 日本の職人像　吉田光邦著　河原書店発行　昭和41年

(12) 日本の美術　至文堂発行のうち，近世初期風俗画，調度，木竹工芸，絵巻物，住居。

(13) 日本の民具　日本常民文化研究所編　角川書刊

(14) 日本常民生活絵引　日本常民文化研究所編　角川書店刊

(15) 図説日本木工具史　中村雄三著　新生社刊

(16) 工芸志料　黒川真頼著

(17) 貞丈雑記　伊勢貞丈著

(18) 調度図会　青木久邦著

(19) 和漢三才図会　寺島良安著　日本随筆大成所収

(20) 七十一番歌合　群書類従巻第五百三

(21) 日本簞笥の意匠と製作　松本朝之助著　中央工学会発行

(22) 古事類苑　器用部

(23) 類聚雑要抄　群書類従巻第四百七十

(24) 廣文庫

(25) 原色日本の美術　4，20　小学館発行